汲古一心

『供養の文字』(二)

中村素堂

しかしこれらはみな、何も文章というほどのものではないから、勝手にこちらが想像しているまでのことであるが、熱田神宮の近くにあった裁断橋のからかね作りの擬宝珠、この擬宝珠に刻んであった文字ほど人の心をうつものは、まずめったにないと信じている。

天正十八年二月十八日に、小田原への御陣堀尾金助と申、十八になりたる子を立たせてより、また二た目とも見ざる悲しさのあまりに、今この橋をかけるなり、母の身には落涙ともなり、即身成仏し給へ、逸岩世俊と、後の世のまた後まで、この書きつけを見る人は、念仏申し給へや、三十三年の供養也。

と、仮名書きや漢字まじりなど四種類かに、同文のものが刻んであった。亡くなった子供のために橋を供養して、念仏を所望をしている。人の子の親でなくてはこんな美しい言葉は出てこないのではないかと、文字の鑑賞を忘れて、一篇の詩のようなこの母親の嘆きにつりこまれてしまうものがあった。

これらはみな供養のこと、仏詣でのことが文字になっているのであるが、文字そのものを供養したものは厖大なる写経の一群ではないであろうか。

お経を写す。これが仏への供養であるとした天平期の官設写経所が、そろそろ私設の写経所に移ってゆくころから、特に経の供養写しが始まったようである。もっともそれ以前にも、たとえば光明皇后さまの父不比等、母橘夫人の冥福のためという奥書きをいちいち書き入れた一切経の一群などもあるから、古くからお経を造顕した勝因によって、永く福祉を得られるようにと祈ったものはあったのでもある。

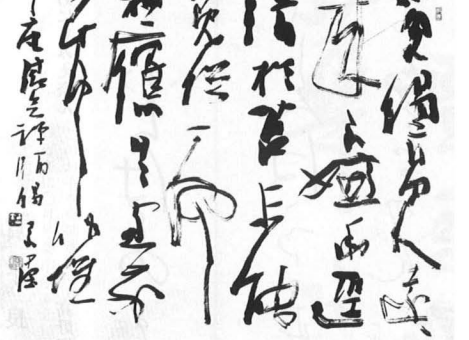
しかしこれは時代の下がるにしたがって盛んになり、平安、鎌倉、室町を通じなかなか心ひかれるものが出来たようである。

足利尊氏なども、後醍醐院の追善のためにという写経や刷り経をいくつも作っている。あの世評の悪かった武将が、後醍醐天皇さまのために安国寺を全国に建てたり、またこんな奥書きを入れた大部の造経をしているのを見ると、一世の英傑の心の裡にも、史書の表にあるものとは違った勝てるものもまた哀しかったのではないかと、ゆかしく発願の言葉書きが読みかえされるのである。

これは日本の話であるが、中国の龍門やその他の驚くべき多くの石仏像の造顕によせられた供養の文字にも、仏にすがらずにいられなかった人の世の敬虔な心を見い出せるのであるが、それは、またの日にしましょう。

〈『大法輪』昭和四十年〉

『筆間雑記』中村素堂随筆集〔昭和六十三年刊〕より転載。



昭和50年　覚偈高人遠々来　不嫌幽逕滑於苔
未能免俗聊相應　日々窓前昏作堆